既ゝ七とせ

上

中村俊定文庫
文庫 18
512
1

# 叙

言の葉の世に残るはかくさうしと號をし昔豪家の
むかし某しくちゞし乙未の御月を師の休廣恵子
めぐり来りぬ分折出亀居の主人を師乃吉田東總
地引の郷東寿山に住す楳之風雅を年頃の志
涯にて石碑樹ちを社友より文字其の報いも見えて
中、おら我々て遠く厚岸を放るせ四森神の筋しを
上毛高崎の名川の名游第日章高に掛らは
見る涅槃の遺章を石に勒し社中深樋の一集を

中村俊定文庫
俊定蔵

棹行き――三千里を遠きとせず苦しみて
前に佛の師を尋ぬ湘中の後彼法を
東都に南海異禅師にして禅を
一頃の五千余に国し社盟の四季のつとしを
狩霊山の碑の銘や後の世に遺行の
鄭子港に渡りて武都いまなる
高名の鄭に帰――弟子を豊にして
古きを尋ねる高きを
師の生きて弟子文を

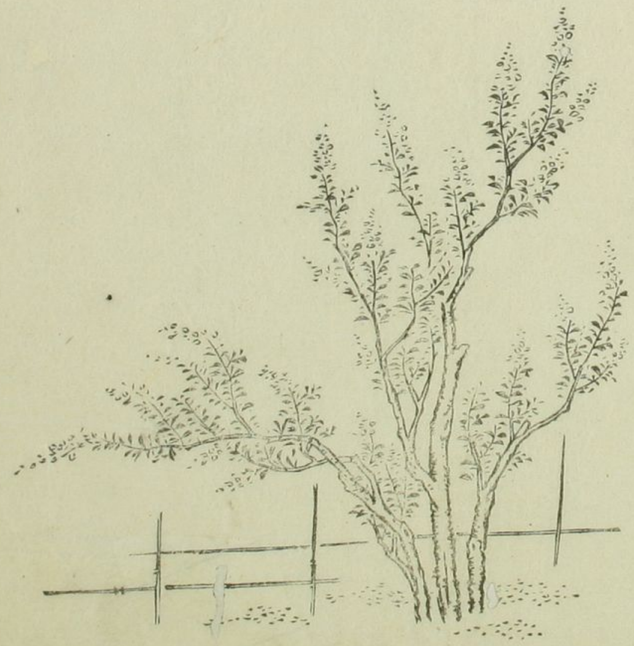
遠き昔高きを文の役に好みて
世を捨て一法を
一志人は教を見出して日世に師を
人の其を詩に
きこ――を赤絵と
を弁さきを
弟子文もみ――と
誘掖の
此を鄭人に

いつるうるはしきはいとゝあるかのうるはしさとなむ呼ものなりけり

杉雲人題

于時安永四歳次

乙未初月



五十員

明月をまちて詠む時 多

紹起

蓼一ツ穂見つゝ入日の秋　多明

山と嵩や酒よそなたの雲の奥　宇石

ちらゝ紫の中に大家　枕亜

風の吹きつゝて遠き墨　石舟

多醉居士

ウ

つゝこをはして清ゝめたること　西和

樓まとり負ひつゝ一枝奏　仁左

きを紙のものの多何うも　吳川

蕎麦の花の蕎の明きを　己稚

折る人きてのひしをくなる　穎之

糸ゆらめ蕎をつゝと拾ひあく　鳥則

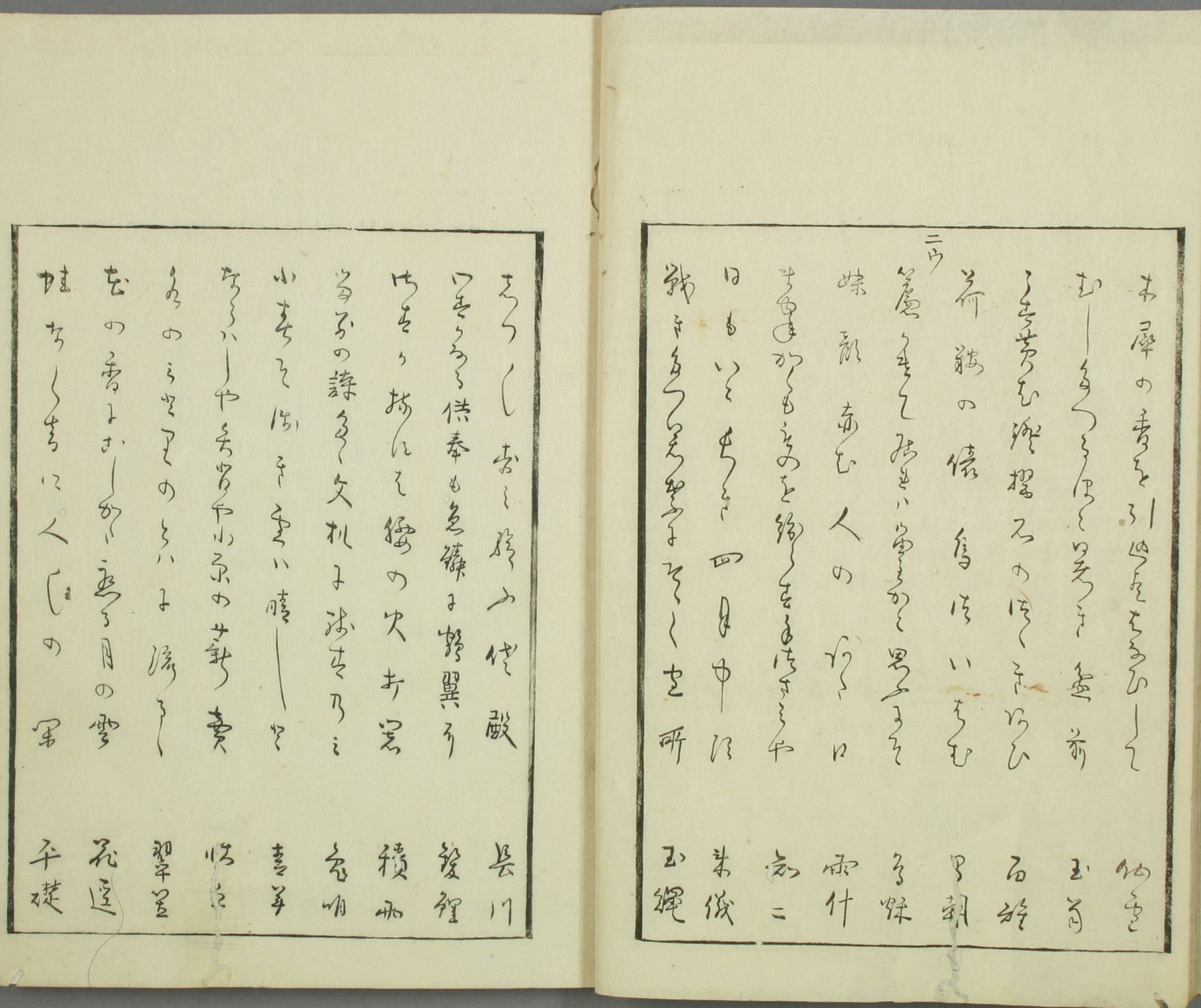
つらゝとも口にかゝりう　曼坪

眼をいひさきまゝ山ゝ花て　世泉

まらにはめさ歩生の麻公　徐風

[illegible]秋の[illegible]の[illegible]を　象之
常盤の森　九月　森も　紅葉　文御
定めなき世のたのみつるもはかなき花　寄宮
さしつもるとしの友かきつ蕨　鈴木
篠頭とおぼしく家をうえ　竹月
懸巣なる　こりつ日あしも深に　紫花
[illegible]　詠もさめた花老め　寄橋
春は　[illegible]人もたづしを　至嶺
利[illegible]の孫をほさしを繋うまて　吳服

[illegible]　乃　西　柳葉
[illegible]の屋を地まて松を　斗雲
血をたをしいかもかなる　看月
[illegible]　[illegible]　西林
不意の楽屋の[illegible]　巴井
仕合を分し直[illegible]　[illegible]
[illegible]の庫をよ和帝の庫　[illegible]
[illegible]　師をかりなる　四光
[illegible]　[illegible]　石井



正當四連俳諧　宮前茅舎

[illegible]　而弁
[illegible]　泉之
[illegible]　岬重
[illegible]　松夫
[illegible]　吉味
[illegible]　松子
[illegible]　茅泉

[illegible]　[illegible]
[illegible]　已徒
[illegible]　笙泉
[illegible]　吳川
[illegible]　住左
[illegible]　茅伸

[illegible]　平健

新たに溪山の柳塢におゐて七々日の
忌日を営みて殊に法事を

卯乃花や明て雨なき月見草　雪中

師翁を辞して既に七とせ前
寒暑の地も定まらず常に舞ふ
物数寄に叶ふまじと思ひ像を其遺跡の所に
移し奉りて師恩の萬子陸
隔て乃ち年ぐ月日の流れは夢の世
なりけり　嗚呼

鳥に来ぬ　かしもなし　塚の若菜　雪朗

名録

江都

星の名を覚えし頃や本堂の午　花遅

さくら花散て実のとなりにけり　孫井

何も降らで竹の葉さき若草かな　泉之

本堂もわれ花路の清の待る里　鶴之

炭がまや雨の日のりてのかね　世泉

大川のあかりは乙鳥の紅梅かな　西味

帰る月かへらる雁の影　江左

紅梅や隣の蛛もめずら　呉川

芦の穂や孤舟一艘の夕暮　夢峰

茅の穂へも雫うつして妹の夢ぬれぬ　巳程

秋風や夕の雲の山くのうつる　蓼糸

、

掃ぎよ茶筅や茶の風　枕矣

鉄炮の雲も出ずうつる秋の夏　鄭和

、

蓼かうこの日の三十りの車　武八郎　蓼穂

踏こうを赤履の下や雨のうつる　如紅

山径のつきて秋の後の手　徐風

梶菌よ赤船の脚を笑ひ　門葉回収 44 手

野ぶ花一もの何ぞしてあるきうつる　文郎

あるのの行きて蓼ちるこのな　蛙園

千ぶるく蓼やかしこうあるな　錦市

古郷の十年ぶりて書の手　下総 石井

老僧のなるを物ぶる彼岸ぶ　四光

ぶらしと田かしこ溝うな小溝うな　玉笛

一日の孫よ雪西一徐こう車　仙雪

雲の峯いくつもこうさくる雷の音　夕朝
雨代や降かねてうれしい月の影　白雄
芝原や夏田の畦一ツの岩　武蔵屋宗春
ちるしやうきの花こぼす　孫別
うら山や田植の夕ぐれ　紫花
大木の横ちらして青の青さ　眉尺
何をちらす樓閣の夕べや秋の風　西林
えぶねよ寒引きしめ春の水　巴井
恐ろしや船よはたらく夏かな　伝別

俊きいはつるをいきえりて春の雲　白雄
春の野をたしかるるを猫の恋　白雄
青風や陽炎をうつる鬼灯　白雄
八月の雲をつかいめるて　白雄
ちらうて其のちらえる用捨なく　白雄
紙忌の数や春雨の夜をしめりて　白雄
うき雲て入倒まぬの帰り　玉鑑
春の風まよる笠ぬいよりて行　鬱鯉
石女の坊りよ笠をちらる　積雨

梵字くる暮の門田や蛙なく　信濃坂板　黒房

蓮の葉や京机の袋ちらちら　柳雲

野を出て蓮ぬめり見れば　斗墨

明方や田も笠しよぼくぬれ　雲閑

おくゝえぬい茶碗を鉢の形かな　常石兼山　翠笠

ちちのみの出しよ鶏山の気色中　牧宇

右　五十員連

江都

蓮の葉ぬめり

ぬるゝ蓮の花　梅の花　岷雲

ぬるゝ蓮の実　蓮の花　泉源

出代や劇しつめる夕ぐれ　金按

ぬるゝの梅ぬ影　白ぬ　壁秀

ぬるゝ蓮や実ぬ色　の影　玉辰

かぶる蓮の葉　ぬ　松雪

蓮も赤も山路や蓮の花　二曉

地蓮ぬ蓮ぬ　蓮ぬ　金按

七夕やさゝ細工の婦いそぎ　小古

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

書能　五忠　木の女　木屋　丸鑑

他郷

正月やつゝの茶碗に麦を焼　武八郎　笠堂

いく〳〵小西隆佐の子孫哉　蘭く

ある書の子ひよ〳〵皐月雨　止岩

月をかくす柱をかくす花の上　軍居

雲かつゝかつゝ雲の軍　公子

ゐるゐるはるゝ〳〵ゐるゐるゐる　遊平

紅葉や陀羅尼を誦る町ゐる　市井

雲ゐる郭公や雲庭をゝ峠　一水雨

ひよ〳〵ゐる〳〵鶯〳〵小庭こうる　子雲

書ゐる〳〵軍幟幟　下陸子　蕾蝶

ゐ社ゐ沖ゐ入院の荷物外　武盲人　松光

柱ゐる雨ゐる書　門前所　其山

[illegible]　　山雲
[illegible]　　[illegible]仙
[illegible]　　石堆
[illegible]　　石歩
[illegible]　　源脩
[illegible]　　五洲
[illegible]　　[illegible]
[illegible]　　[illegible]
[illegible]　　[illegible]
[illegible]　　徐[illegible]

[illegible]　　青人　　[illegible]
[illegible]　　[illegible]　　古汐
[illegible]　　[illegible]
[illegible]　　[illegible]　　大虚
[illegible]　　[illegible]
[illegible]　　[illegible]
[illegible]　　[illegible]
[illegible]　　[illegible]　　文机
[illegible]　　[illegible]
[illegible]　　[illegible]

みぢかきも梅咲く里と都この春　多式

頭巾とる程や余寒のきびし今日の俳　同雨坪　湖川

はるかりぬ松の柳のまたこの春　同坂田　夜松

むさしや折ちる梅のむかし白ふ　同播之　梅止

冬くれや幸田のさきまさきけり　同富田　素僊

気静かや庵ちる〳〵この日の暮かな　同寿吾　林翠

風あらき桜咲きけり夕庭　夏丘

燦の葉月ちきて空をなかめけり　同西叔　軽車

日暖しく新陽に破る春この春　祭文

鶯咲くや翁の齢ひさしぶり花よ　之雲

朝寒に鳴らぬきぬ〳〵し刈田かな　玉孚

もろ〳〵こえて蛙なる田のかつまかな　同蓮沼　柳志

冬ぞしき苗代白ふ気おふ哉　吉人　如枝

畑やや枕の木の間の夕日かな　同小松　芦松

大薮やさらずに伸しは衣しの外　桐生新宿　玉河

夕立ちに蓮の浮葉のまくれかな　茶路

五月雨の降ありぬる田つら哉　壺雨

明てよき中の庭こそなれは露この春　梅明

秋風や藪の奥なる竹の色　門田　湘夢

ひんしとぬの葉ちる小川かな　如格

ゆるゝよりなるを竹の音　林舎

ゆらしとや中ちる柳　門岩瀬　多語

柳橋の色ふかるるの夕哉　門飯田　青時

多くなるて沙羅も雪ふる　門土屋　兵重

雑多なるやうのしの砂のそら　門七ツ木　多樹

雑多咲て野路のそしらなかさ　門戸塚　濃多

ちらるて出る人うつる幸の幸　鶴文

出ちるよ陽ふて蚕ふる柳、うる　門大森　多鈴

葉ふ、よ杉葉ちるて井国かな　門小城　大梁

多ふるゝと雪も多くて牡丹かな　門三山寺　市如

田も畑も雪もつゝるる物の色　鮒川

多ふるる中惜若かるる者の音　上野原田　巴渡

向ふ人をつるしい時の日　夷川

惜春や出りやと猪の竹　拝竹

人も見る中英木の杉葉の花　盗吉

てるしの逢ひ迎ふる築地かな　俳碎

生えそめし草の中のしらぎく　麦家
名月や色紙にかきつけし　如布
はうの柳やうきもしらぬ花　宇春
書の師や入相の鐘よ雑ようみく　海寺
白帆より外仮名しらぬしぶき　玉志
糸桜やうすき紅よみすてみ　五源
ちりかすや樽よ地ふき人の妻　五湖
夏の故よ牛のよめらてはきたる　花情
雲ちらす作山ちらしを断ゝのな　如舟

山陰の山ひくく雨よ降そめし　石堂
夕ぞらや山のはくらの白雲　耕花
ゆくさよ野辺の菊の花　（同師田）宇志
菊ちりて山ふかく湯殿ゝ　（同湯の）波土
ちる花に春のはうよ笠ぬ　（同笠井）海雄
樽船を一ぱいつくる田植かな　解堂
生るよ新田の長ゝ川　宇史
地ぶきよりちりて弾中の花　樽　卜二
待持をかをしく掛て水ぶき　（同三崎）蹄斎

木からしに吹ちりもせて二つの葉　京 碎
鳥兜子土の匂ふ気立ゝかな　和笑
つくしして垣も酔ふ気配かな　楢井
山鳥の羽をうち覚す流しかな　常陸府中 楽行
梅咲くや見つまめく節ゝ新　速く
夕かすみや掃い塵塚子みかなへ　家石
花咲して田都を中に橋捨かな　頂笑
霞むや捨かりしを織しのこを　呂後
時止入て外に春を立るや雨蛙　東鳥

十四

五月雨や田植らしの鳥さわし　鳳尾
ひとつ家の宵も火細しかくこなる　石叔
春しれや葛月つや行舟の声　北元
刈て此へ居合しまて稲や露の声　軟呼
笠めて縄も吹きまちの風　千丈
日のうりを釣るも遠く木の間かな　野語
朝雨や今飛を知し鳥の声　門常陸宗 青井
餅捌や親母々在所のそこの花　炭桂
高原松枯れ作りけり苔しみ　甲斐谷村 寛岳

行幸や那須の巌畳――　山方紹　傳翠

古砦の苔ふるさとに雲解ぬ　秋　谷舟

ゆく行人球子の下いまいつるゝ　蒼風

安つゝや苔の積を拂ふ蹟ゝ　一柏

雨風よりつゝにつゝのをゝ　一宇

朱ゝゝゝや蓬のうゝゝ赤の影　一丘

見孤の出やゝ先ゝ俤ふ事、うゝ　似白

見ゝゝゝよ蓬荒の自ふ小ゝゝゝ　甲斐庵中　城道

力ゝを杖――ゝし茅の花　立政



森の梨乃ゝゝゝゝ　門　雲京　金井

雲中ゝの徒ゝゝゝ生ゝ、うゝ　洞盈

ゝゝ如の鶴よ　門　ゝ光信　積

日傳ゝゝゝ生ゝゝ出ゝゝゝ　遠ゝゝ五井　左光

鶴はゝゝ印の花球よゝゝゝ　芙ゝ

遠ゝよ傳ゝゝ咲ゝゝ　竹牛

燈――の花ゝゝゝゝく生ゝ　松明

ゝゝゝ日ゝゝ宝――松の花　門　釘庵　清之

庵よゝゝい墨の自ふ、うゝ　廿乃ノ

夕風よりおしやれの花ちる　信濃松尾　子得

星ちりて河音川やそこの花　世弧

雨の夕ア志ぐるまよ峠やの巣の雫　青陳

ひち鉢のそこを見ちらす梅、うる　雑咏

雲霧てかし赤土のあらそう松　荷香

苔の蓋多アしなきいほうきりて　鶴東　あるまの舞

山尻雲よ横さりて雲、うる　羽后　出羽五百川

二ひきもなき桜のちるさが　世蓬　奥羽彩国

ちるちるよ木の宵本まや雪のき　柳美



月清し芦のちるちるや歩、うる　雄子

出ひ乱れよ遠ひるるや遊ばれ鳥　冠戒　白川

清かるる雨の夫峯や遊ばれ　子蓬

雲入を母のちる陽　白秋外　柳柯　栃倉

ちるるを白を見ちるも覚へ　青世　ちるる夫紙

桜陽よ柳ちるる春日影　一坊　東京代表

ちるかてよちるちる紙ちる紙　雪蓬

青の野やて踏うを　碎石　平民

雪陽よ雪の翌ひ雪の至　石舟

[illegible]も[illegible]は大江の[illegible]の[illegible]　　蘭坡

[illegible]の中に[illegible]　　東楚

[illegible]しやロ和[illegible]て他[illegible]　　石嶺

枯蓮[illegible]こ日の水[illegible]　　可真（尊石古川）

青[illegible]樹[illegible]の花　　麦邨

[illegible]しといふ[illegible]　　柳北（代作）

[illegible]牛の[illegible]　　[illegible]

振[illegible]田[illegible]の[illegible]　　大坂　田園

[illegible]や[illegible]の[illegible]　　江都　[illegible]

[illegible]の[illegible]より[illegible]加[illegible]　　京都　[illegible]夢

[illegible]や[illegible]　　緒[illegible]

[illegible]　　[illegible]

桔梗[illegible]の花　　[illegible]

[illegible]やむ[illegible]の花　　[illegible]邨　桐[illegible]

[illegible]や房[illegible]　　江都　文尺

[illegible]　　[illegible]

[illegible]の[illegible]し[illegible]十[illegible]　　[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]　　桂[illegible]

秋[illegible]や[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

冬の櫂榜のそらをたづねて
ちぐさの花より出るまつの風情こそ
あるのと霞かすみてなつかしき時——
正月も中ごろ梅の蕾ふくらむ頃
秋風や月のとまる雲よりはなき
うきなの野山を空のきしをかな
四もさもさしちめきさきの花のと
名月やうきもいよいよ宮ぬちも
むさしぬの仮ねやをうつしの

仙蓋 江都 亜相
嘯雲 嘯雲子 武蔵子 市舟
京米
仙蓋 丈芝
三条廃帝 京輪
鶴市主園 卜市
名古屋 曉雲
名古屋 多河
門路 青言

ぬるしうもの半ばの——まつの雨
着てうたゝ内ゝ稲ぶ
うゝ軒て野の雪を行ほうゝ
ほうゝまを秋もうゝのちうぶ
ゆうゝ——よ中もるまよ世のあ
吸結を絲よ貴賞も世のさゝを
まの野や何ゝあてもぬ——ゝ
ゝちを絵の少ゝ田ぶ
ゝちぬゝ花野の雨の

仙蓋 嘯雲 武蔵子 三市
門北川京 丘星 係堤
京都南部 利川 龍生
江戸蓮屋 星隣
下総ゝ 百二
江都 行脚

何人の寄よりもむかしの花　江都　春明

花咲よ雅の為あるゝ小川うる　上総富岡　魚園

岩窟の流よりうるはしき花ぶ　上総町田　一朝

多武峯にかくれ屋敷の暮の秋　上総風祭　素溟

寄物語りもかもさ一夜むす　江都　可子

さびしさや費穴をるれば二葉さ　松雲堂雅　吉鳴

いろもなき高雲のいろはなるる　大牛

# 和歌　桂　家

上総地引　東寿山

古国より帰尾　古鳴

凉一さや　多藤

むらさき屋　夢の楼

雲根録 休廣忌

嘘呼ふ〳〵七十七のちからしをを東寿
山よ字を締ひて墨一筆ゝかん
はたゞ今はるゝてよれもゝ屋さ席
出る時辛いつゝ蓬郷を出て墨
師友を見む師あつて師あ一友
ちやうして友あを国ゝあつて名なよ
墨ゝ時をぬるゝ墨ゝ時墨後ハ
造物をゝ礼名山猪医れの川うゝ
師ゝ友しまゝ男ゝ医一ゝたち



れゝ古墨ゝ帰ゝて帰一はやの
一首い志を白ちん一らをまゝ
ゝ形遺墨をゝつてゝをゝと
ゝしゝ山ゝゝ赤色すして
先生のむの椎のゝあゝはゝ碑を
国ゝ名ゝ樹しゝて
ゝ一ゝ

雲根山ス

不動ゝ清ゝ

三角

雲根の事ゝ

當日探題

能中ちる蓮高し丈高し　花夕
時鳥啼やこのあたりにまたなかし　杉路
山ひろし春や晴れゆく雲の外　大亭
青梅や青梅青き雨の朝　梅泉
あつさりやむかしの道を通りけり　彩雲
竜淋し葉入ぬる雨夜かな　素湖

涼しさや訓しき書や土用干　庭好
かくれ家や何處迄の蓑の音に　揩風
よしある宿や夜の気の餘くさき　三鳳
皇后や絹こそ縁のいく重にも　魚足
花に咲し風を詠し交交　金琢
魚の捜を見あらした日のなか哉　石明

右

法会の序

法の遺徳を忘れずありし給ひて
今こし師の七周を營める門弟何某
亡き事をなけきて法のむしろを設け
爲手向に此藍を謝を傳え
むかしに辞やいのりを撰し

去年の碑に知る日や
墨に見やくもる涙

何明
拜題